

進路指導室から 第265号

はじめに

2月8日(土)に宮島で本校のマラソン大会が行われました。当日は、「かき祭り」の時期と重なりましたが、新型コロナウイルス関連肺炎の影響でしょうか、例年よりも人手が少なかったように思いました。

さて、毎日新聞朝刊に、「人生相談」の記事が連載されています。回答者は、作家の高橋 源一郎さん、落語家の立川 談四楼さん、女優の渡辺 えりさん、漫画家のヤマザキ マリさん、コラムニストのジェーン・スーさんです。その中でも、高橋源一郎さんの回答は高橋さんの人生経験にもとづいた深い内容です。

2月2日(日)の相談は、30代女性によるものでした。20代の頃は思いもよらないことがあったようです。それでも周囲の支えでなんとか立ち直り、次の夢を見つけますが、今度は若年性の早期乳がんにかかっていることが判明します。女性は、『二十歳の原点』(高野悦子著)を再読し、高野さんが残した「独りであること、未熟であること、これが二十歳の原点である」の言葉に共感し、今は生きたいという思いをもっているようです。相談内容は、高橋さんにエールをくださいというものでした。

『二十歳の原点』は、高野さんの二十歳の誕生日である1969年1月2日から1969年6月22日までの、約半年間の日記をまとめた本です。私もこの本をもっていますが、学生時代にはかつて高野さんがたびたび訪れていた京都の喫茶店「しあんくれーる」にも行ったことがあります。

高橋さんは回答にあたり、自らの若いころにうまくいかなかったことを振り返りながら、その当時は「能力はあるのに」と思っていたそうです。しかし、結局、ひとりになった時、いつもなにかに依存し、うまくいかなかったことは誰かのせいだと思いこもうとしていたと書かれています。そして、相談者に対して以下のようにエールを送っています。

そうではなかった。ひとりになって初めて、自分がなににもでもないことがわかったのです。わたしには、ほんとうに生涯をかけてやりたいことがあったのに、それに向かって踏み出すことを恐れていたのです。

近くになにかがあると、それも、みんなが「いい」というなにかがあると、そのなかに、わたしたちは頼ります。そして、自分のほんとうの姿を見ようとしなくなる。おめでとう、といいたいです。だって、わたしたちに必要なのは、ただ一つ。「生きたい」と願う能力だけだからです。

あなたには素晴らしい能力がある。それは、わたしが30年かけて、ようやく手に入れたものでした。わたしも、あのとき、ただ「生きたい」とだけ思えるようになったのです。そこから、いまのわたしに続いています。「二十歳の原点」を私も読みました。すてきな本ですね。でも、同時にこう思ったのです。「生きなきゃダメだよ、高野さん」って。

私自身も人生の中でうまくいかないことばかりでしたが、その時その時、生きる目的がおぼろげであったも、「生きる」ことが大切だと思っています。

「第5回保護者対象進路研修会」について

2月15日(土) 14:00~15:30の予定で、河合塾英語講師の坂口雅彦様を講師としてお迎えし、「第5回保護者対象進路研修会」を行う予定です。今年度最後の保護者対象進路研修会になりますが、当日は定員の80名をこえる保護者の参加が見込まれています。先日、坂口様と講演内容を調整しましたが、講演内容は以下のとおりです。

- これからの大学入試に向けて必要となる力について
- 大学入学共通テストの英語の動向とその対策について
- 坂口様の英語取得の方法について
- 受験生の保護者の役割について 等

一応、想定学年は2年生としていますが、他の学年の保護者の参加も可能とします。(今年は、例年と違い1年生の保護者の参加希望が多くなっています。)

「小論文講演会」について

2月6日(木)に月刊情報誌「学研進学情報」監修、小論文入試問題分析プロジェクトチーム編集長の大堀 精一先生を講師としてお招きし、「小論文講演会」を行いました。

まずは、「いい答案とはどういうものか？」についてでした。この点について、小論文は「筆者の主張を理解する」部分とそれに対して「自分の意見を書く」部分から成り立つものとして、筆者の主張の理解がきちんとできなければ、自分の意見を書くこともできないと話されました。



そして、小論文を書く際の基本パターンとして以下のように示されました。

- | |
|---|
| <p>① 常識論・一般的な見方の確認
 ⇒ 筆者は当たり前のことには言わない(常識論とは別の視点)
 ⇒ 筆者はどんな常識論に違和感を覚えたか</p> <p>② 違和感を「でも」という文脈で掘り起こす(「私も筆者と同様に～疑問がある」と常識論を表明する)</p> <p>③ 現実を多面的に見ることによって違和感の根拠を示す
 ⇒ 筆者と違う材料や経験に基づいて主張を明確にする
 ⇒ 漠然とした一般論ではなく具体的に根拠を示す</p> |
|---|

①と②を通して、筆者の違和感(別の視点)を共有することは、自分がそれまでと違った視点からものを見ることにつながることから一番大切にしなければならない観点だと言われました。

また、「本気になって合格したいなら、いまこの時点で読み出す!」「最後まで読めなくてもいい、読めるところまでしっかり読む」「自分の心に残った箇所を書き写す」「読んでわからないところは先生に聞いてみる」「ただし、自分で考え抜いたうえで質問する」ことをアドバイスしていただきました。

「大学入学共通テストにおける国公立大学のリーディング・リスニング配点比率」について

来年から、これまでの「大学入試センター試験」にかわり、「大学入学共通テスト」が行われます。「大学入試センター試験」では「筆記」と「リスニング」で出題されていた英語が、「大学入学共通テスト」では「リーディング」と「リスニング」の出題となり、配点も変更となります。

「共通テスト」英語の問題作成方針、そして、出題方法のポイントは以下のとおりです。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■ リーディングとリスニングの配点は均等(各100点)。 ■ 各技能の点数との入試での比重(重み付け)は、各大学が決定。 ■ 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションで、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できるかを「読む」「聞く」で評価。 ■ 実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視。 ■ 発音、アクセント、語句整序などの単独問題は出題しない。問題レベルは、CEFR A1～B1。 ■ リーディング・リスニングともに、概要や要点を把握する力、情報を読み取る力等を問う。 ■ リスニングの内容は、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わること。 ■ リスニングの音声は、多様な話者による現代の標準的な英語を使用(試行調査ではアメリカ英語、イギリス英語、日本語母語話者による英語が出題) ■ 音声読み上げは1回読みと2回読みを出題(すべて1回読みにする可能性も今後検証)。 |
|---|

※ 「旺文社 進学情報 今月の視点(2月)」を参照

下の表は、代々木ゼミナールから提供された資料で、2月4日(火)段階のR(リーディング)とL(リスニング)の配点(比率)です。

〔R(リーディング)とL(リスニング)の配点(比率)〕

R100:L100 (1:1)	国立	北海道大、小樽商科大、弘前大、東京学芸大、一橋大、名古屋工業大、豊橋技術科学大、広島大、鳴門教育大、福岡教育大
	公立	札幌医科大、札幌市立大、秋田県立大、山形県立米沢栄養大、長岡造形大、長野大、静岡文化芸術大、三重県立看護大、福知山公立大、公立鳥取環境大、福岡県立大、大分県立看護科学大、名桜大
R200:L50 (4:1)	国立	福島大、茨城大、筑波大、群馬大、千葉大、新潟大、信州大、神戸大、奈良教育大、奈良女子大、鳥取大、島根大、岡山大、山口大
	公立	釧路公立大、青森県立保健大、宮城大、群馬県立県民健康科学大、公立小松大、名古屋市立大、広島市立大
R150:L50 (3:1)	国立	東北大、宇都宮大、東京医科歯科大、岐阜大、名古屋大、京都大、大阪大
	公立	新潟県立看護大
R・Lの比率が学部ごとに異なるあるいは上記以外の比率	国立	帯広畜産大、東京農工大、三重大
	公立	茨城県立医療大、東京都立大、岐阜府立大、京都府立大、下関市立大、山口県立大、沖縄県立看護大

※ 赤字の大学は大学入試英語成績提供システム導入見送り前に公表

終わりに

先日、国公立大学の出願のアドバイスをした生徒が来て、先生の「読み」が当たっていましたと報告に来てくれました。ここまでは私の仕事。ずいぶんと感謝してくれているようでしたが、合格してはじめて感謝の言葉をもらいたいと思っています。ここからはあなたの頑張り次第です。

(文責:進路指導部 池本 邦彦)